

韓国プロ野球

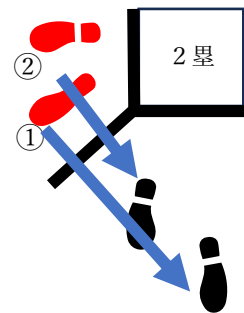
2024/3/13

今日のニュース番組で、韓国のプロ野球では、今シーズンから投球判定にロボット審判を導入するそうである。それだけ、投球判定に誤りが多いという事であろう。今後、ストライク判定は球審の個性ゾーンはなくなり、どの試合も同様な投球判定がなされていく事となりそうである。先日の会合で、「ストライクゾーンの確立」を今年のテーマにしようと提案した理由には、低い投球をストライクとコールする場面や、ゾーンがばらけることが多く見受けられたからである。原因を分析すると、目切りが早いことが大きな原因の一つである。当然コールも早くなってしまう。昨年からストライクスリーのオーバーアクションが軟連でも解禁になったが、アクションに切れを出そうとして、スリーのコールが早くならないように注意してほしいものである。

MLB の開幕戦が韓国にやってきた

2024/3/20

MLB ドジャーズ対パドレスの開幕戦の第一戦が3月20日に韓国で行われ、8回の表1アウト走者1・2塁で2番打者の大谷がレフト前にヒットを打ち2塁走者はホームインし、走者1・2塁で3番打者のフリーマンがボールカウント2-2から打ったライトフライは捕球された。2塁を回っていた1塁走者の大谷は、あわてて1塁に戻ったのであるが、ボールが2塁に送られ空過のアピールで大谷はアウトになってしまった。右の図は、2塁ベースと大谷の2塁ベース付近の足取りである。2塁ベースから3塁ベースに進塁しようとしたかどうかは、2塁ベースに沿って図に入れてあるY字の部分を超えた地面に両足をつければ2塁を回ったと判断されることになる。よって大谷は1塁へ帰塁するにあたり、2塁ベースを踏まないとアピールされればアウトになるのである。



2024/3/30

審判仲間の二人制の試合を観に行くと、1塁走者の2塁盗塁を塁審が止まらないでジャッジしている様子が気になった。3試合あったが、どの塁審も止まらずスタンディングでジャッジしていた。本人は止まって判定していると思っているのであろうが、止まっていないのである。止まって判定するためには、「待ち構えてプレイを見る」という意識を持たないとできない。しっかりと腰を落として待ち構える姿勢をつくってほしいものである。また、塁審の動きをみると緩慢に見えた。1つのプレイのなかで、はじめと終わりの区切りをつけ「静と動」を使い分けた動きをしてほしいものである。

打者がバッターボックスを移動する

2024/3/31

2ストライク後に打者がバッターボックスを移動することはできないのではないかという質問を受けたので、この問題を規則書で確認してみよう。

「打者の反則行為」については6.03に記載されており、同(a)には「打者の反則行為によるアウト」が示されている。その中の(2)に「投手が投球姿勢にはいつたとき、打者が一方のバッターボックスから他のバッターボックスに移った場合」とある。また、同【注】には、「投手が投手板に触れて捕手からのサインを見ているとき、打者が一方から他方のバッターボックスに移った場合、本項を適用して打者をアウトにする。」と記述されており、2ストライク後に打者がバッターボックスを移動することは問題ない。

6.03には、この他にも皆さんがよく知っている4つの打者の反則行為が乗っているが、注意しなければならないのが、6.03(a)(3)・(4)の例外である。これは、競技者必携の問題で取り上げられているので、広く周知されていると推測するが、念のために掲載しておくこととする。「打者が空振りをし、スイングの余勢で、その所持するバットが、捕手または投球に当たり、審判員が故意ではないと判断した場合は、打者の妨害とはしないが、ボールデッドとして走者の進塁を許さない。」

2024/4/7

学童野球の関係者から聞いたのですがと、審判員仲間からこんな質問を受けた。「学童の投手がツートンカラーのグラブをはめていたので注意したら、学童関係者から今年からいいことになっている」といわれたが本当かという質問であった。軟連では、今年度から「大谷グラブ」の関係で、学童・少年野球の投手はツートンカラーのグラブ使用が認められていることを伝えた。

二人制で3塁走者のタッグアップは誰が見る

2024/4/7

二人制では、表題のタッグアップは、球審が打球判定をする場合でも受け持たなければならない。レフトから左のファウル地域の飛球は3塁線をまたいで打球判定することがよくあるが、打球方向に3塁があるので比較的タッグアップが見やすい。しかし、ライトから右のファウル地域の飛球を判定する場合は、1塁線をまたいで打球判定をした後に首を振って3塁タッグアップを確認しなければならない為に少し技術が必要となるが、怠ってはいけない球審の仕事である。3塁でのタッグアップのアピールがあった場合、タイムをかけて球審が塁審に確認し裁定を下すようであれば、チームから不信感が生まれる可能性があるのを避けたい。

ウルトラトラブルボールの外野飛球を判定する場合の塁審のテクニック

2024/4/7

外野飛球に飛びついた外野手が、捕球したかと思われた瞬間転がりグラブからボールがこぼれ落ちた。塁審はキャッチの判定をしたが、こぼれたボールを見てノーキャッチの判定を入れなおした。これが後に問題となった出来事の一つである。

走者なし、センターから右側の打球がトラブルボールになった場合、塁審はゴアアウトして打球判定を受け持つが、上記の様なウルトラトラブルボールの場合、外野手が捕球しようとしたら、しっかり止まってプレイを見ること、その後、外野手が転がっているようであれば、3～4メートル更に走り寄り、状況を凝視して判定を下してほしい。決して早まった判定をしてはいけない。そして、この判定はいつもより声を張り上げて連呼することが大切である。

走者ありの場合、塁審はセカンド前かショート前にポジショニングしているが、レフトからライトの範囲の打球がテリトリーとなる。打球が飛ぶとステップアップターンして打球を判定するが、打球がトラブルボールになった場合、塁審はベースライン近くまで行って打球判定することになる。しかし、走者を担当する役割もある為、ベースラインを越えて外野方向へ出てはいけない。

二人制の試合を見ていた時である。ノーアウト走者3・1塁のとき、3塁線のすぐ横のファウル地域に強い打球がバウンドしていき、3塁走者に当たりそうになった。もし、当たればどうなるかと隣で見ていた審判員に質問してみた。すると、彼は規則書をめくって6.01a (2) にこんな文があるを見つけくれた。「打者または走者が、まだファウルと決まらないままファウル地域を動いている打球の進路を、どんな方法であろうとも、故意に狂わせた場合。」これは「打者または走者の妨害」の項目である。このペナルティは、走者はアウトとなり、ボールデッドである。他の走者は妨害発生時の占有塁もしくは打者走者が1塁に達していないうちに妨害が発生したときには投球当時に占有していた塁に戻ることになっている。では、走者が打球から逃げきれずにボールを捕ってしまった場合は、故意に狂わせた場合にあてはまるだろうか。今回のような3塁線のすぐ近くの打球であればバウンドがイレギュラーしてフェア地域に入らないとも限らないではないかと更に質問してみたら、「打球が回転しながらフェア地域に入っていくような打球があてはまります。」と答えが返ってきた。なるほど回転しながらの打球であれば逃げきれない打球ではないだろうから捕りに行ってしまうことはほぼないだろう。するとファウル地域の強い打球で逃げ切れなくて捕ってしまった場合に「故意に狂わせた」という文言を適用すれば強い抗議がくるだろうことは必至であるから避けなければならない。**ファウル地域で回転しながらフェア地域に入りそうな打球を走者がつかんでしまった場合に適用すればよいと意見がまとまってくる。**そうなるとファウル地域で捕ってしまった打球に対して打者に対しては、どのように適応すればよいかという事になるのだが、1塁に進めるわけにいかないのが、ファウルで打ち直しという事になるのではないかと想像がつくが、ではその文言は規則書に明記されているのか。審判員としては、監督から聞かれた場合、根拠となる規則がないと不安になってしまうのだ。**6.01a(10)**の後段に「走者がファウルボールに対する守備を妨害したとして、アウトを宣告され、これが第3アウトにあたる場合、打者走者は打撃を完了したものとみなされ、次のインングの第1打者は次打者となる。**(0アウトまたは1アウトのときは、打者はそのまま打撃を続ける。)**」とある。

2024/4/7

走者なしのとき、右打者がハーフスイングをしたので、球審は塁審にアドバイスを要求したところ、塁審はノースイングと判定した。二人の控え審判員は明らかにスイングと見ていたとき、守備側の監督がタイムを要求してベンチから出てきた。監督は球審に対してノースイングの判定についての抗議であったようである。さて、このような時、球審としてどの様に対応できるか力量が問われることになる。監督はハーフスイングに対する抗議はできるのか？

8.02 c 【原注 2】 後段に「監督が、ハーフスイングに異議を唱えるためにダッグアウトから出て一塁または三塁に向かってスタートすれば警告が発せられる。警告にもかかわらず一塁または三塁に近づけば試合から除かれる。監督はハーフスイングに関して異議を唱えるためにダッグアウトを離れたつもりでも、ボールストライクの宣告について異議を唱えるためにダッグアウトを離れたことになるからである。」

よって、今回の場合、監督がベンチから出てきたのはハーフスイングの裁定についてであることは容易に予測できることであるから、ベンチから出てこようとしたときに、球審は「ハーフスイングの裁定について異議を唱えることはできないから、一歩でもベンチから出れば試合から除かれます。」と警告する必要があったのである。

以前の瓦版で指摘したルール適用の過ちが再び

2024/4/7

守備側の監督がタイムをとってマウンドに行き、投手を含む内野手と話をしてから、ファウルラインを越えて球審のところまで下りてきた。そして、投手の交代を告げようとした。球審は投手の交代を受け入れようとしていたので、控え審判が、打者がアウトになるか1塁に出るか、またはチェンジにならないと投手の交代はできないことを球審と監督に告げた。試合終了後、その監督には規則書の5.10 l 【注2】「監督（またはコーチ）が投手のもとへ行った後、ファウルラインを越えて引き上げたら、その投手は、そのときの打者がアウトになるか、走者になるか、または攻守交代になるまで投球した後でなければ退くことはできない。ただし、その打者に代打者が出た場合は、この限りではない。」という文言を見せて確認してもらった。審判員は瓦版の内容をよく理解してルールの適用を誤らないようにしてほしい。

2024/4/14

打者が内野ゴロを打ったが内野手の1塁送球がやや高く、1塁手がジャンプしてキャッチしベースを踏むのと打者走者がベースを駆け抜けるのと、どちらが早いかわかせるプレイが生じた。塁審が力強くアウトのジャッジをした後、攻撃側の監督がタイムを要求し、「打者走者の足の方が早くなかったですか？」と球審に聞いてきた。球審は「確認しますね」と答え、塁審に確認、ジャッジは勿論変わらなかったのだから、監督に「ジャッジ通りアウトです。」と答えると監督は素直にベンチに帰っていった。さて、ここで問題なのは、アウト・セーフのジャッジに監督は異議を唱えることは可能なのかという事である。審判員の裁定の項目 8.02 a に「打球がフェアかファウルか、投球がストライクかボールか、あるいは走者がアウトかセーフかという裁定に限らず、審判員の判断に基づく裁定は最終のものであるから、プレーヤー、監督、コーチ、または控えのプレーヤーが、その裁定に対して、異議を唱えることは許されない。」とあるので抗議を受け入れる必要はないのであるが、監督が抗議をする場合、アウトかセーフかという言い方ではなく、「ボールを落としているから確認してください」など事実を述べる言い方で来られると確認せざるを得ない。独立リーグの監督は事実確認を要求する言い方で抗議に来ていた。今では、MLB や NPB では、ビデオ判定を取り入れているので、相撲の様に審議することが当たり前の様にとらえられている感がある。規則書通りでは角が立つが、柔軟な対応が要求される場面である。勿論、今回の場合は、審判のジャッジメントであるから、裁定をひっくり返すことはないが、落球していたような場合は、裁定を覆すことはありうる。

デッドボールのときの球審の動き

2024/4/16

直球に近いような速い投球が身体上部に当たると、打者が興奮して投手をにらみつけたり、投手に向かって歩き出そうとする行為がアマチュアでもある。そんな時、あなたが球審をしていたらどう対応しているのだろうか。

まず、素早く打者と投手の間に入って、両者の目線が合わないようにすること、そして、打者と投手の目線を遮りながら打者を1塁方向に行かせることが大事である。プロでは、速い投球が頭部や顔に当たると危険球で投手を退場させなければならないが、アマチュアでは危険球退場は採用していない。

「先日の試合で球審がーフスイングのリクエストがないのに、塁審に振っていました。捕手や監督からリクエストがないのに、塁審にリクエストをしてもいいのですか」との質問を受けた。審判経験者なら「勿論、OKだ」と答えるだろう。特に以下のような場面では、リクエストがなくてもすぐに塁審にリクエストをすべきである。

例えば、ボールカウント 2-2 の次の投球のときに、打者がーフスイングらしい動作をし、捕手が投球を後逸してバックネットまで走って捕りに行ったが、球審が「ボール」とコールしたため、打者はバッターボックス内に立ったままだった。捕手はボールを拾って戻ってきた後にスイングだから塁審に聞いてくれとリクエストした場合、球審は塁審にスイングかどうかを尋ねなければならない。塁審がスイングのジャッジをした場合、攻撃側からどうして今になってリクエストするのか、もっと早くリクエストしてくれたなら振り逃げができたのにと抗議が来る可能性がある。だからこのようなケースの場合、球審は捕手が後逸すると同時に塁審にリクエストをしておくべきである。

こんな質問をされた②

2024/5/3

先日、ある保護者から小学生の試合であった出来事について質問を受けた。攻守交代し、本来 7 番打者の打席なのに、8 番打者が打席に入りヒットを打った。次に 9 番打者が打席に入りヒットを打って、走者 1・2 塁になったところで、攻撃側の監督からタイムの要求があり、打順を間違えたので、1 アウトになってもいいので走者 1・2 塁で試合を続けてほしいと申し出があった。球審はそれを受け入れて、1 アウト走者 1・2 塁で試合を再開したのだが、それでよかったのかという質問であった。

6.03 b (1) に「打順表に記載されている打者が、その番のときに打たないで、番でない打者(不正位打者)が打撃を完了した後(走者になるか、アウトとなった)後、相手方がこの誤りを発見してアピールすれば正位打者はアウトを宣告される。」とある。また、

【6.03b 原注】「審判員は、不正位打者がバッタースボックスに立っても、何人にも注意を喚起してはならない。……」とある。

今回の場合のポイントを以下の様に整理して、攻撃側の監督の申し出はアピールとはならないので、受け付けてはいけないことを保護者に回答しておいた

- ① 不正位打順のアピールができるのは守備側からであること。
- ② 不正位打者であることを審判員が気付いていても、注意を喚起してはいけないこと。不正位打順の 8 番打者は、次の 9 番打者に一球投じられたことで正位打者と認められたことになり、よって 9 番打者も正規の打者となる。

3人制の試合で、走者なしのときに、打者の強い打球が3塁ベース付近を外野へ抜けていった。3塁塁審はファウル方向へ右手をポイントしたままであった。周りから、「フェアだ!」「ファウルだ!」「どっちなんだ?」という声が漏れた。試合を見ている人は、野球ルールに精通した人ばかりではない。審判員はわかりやすいジャッジを心がけるべきである。ポイントの後にファウルのメカニックと共にきわどければ大きな声で告げるべきである。